

戦後探偵小説と新宗教

高木彬光・横溝正史・松本清張



小松史生子

KOMATSU Shōko

本稿は、日本探偵小説の戦後動向から「ミステリーと神秘 (mysterium) ——探偵小説をめぐる文学・哲学・神学の交錯——」のテーマを抽出するにあたり、特に1940年代～50年代にかけて発生した新宗教ブームの世相を補助線にして考察していくものである。

敗戦を迎えGHQ占領下の状況となった日本において、それまで敵性文学として軍の検閲に睨まれていた探偵小説文壇は復活の兆しを見せ始める。且つ、その兆しは、単なる戦前の文壇状況の復元には向かわず、むしろ戦前の探偵小説動向とは評価軸を異にした、新しい領域への開拓精神として現れたところに特徴がある。端的に言えば、それは海外ミステリ動向と同時代性を持つことを目指す本格長編作品への挑戦¹であり、また探偵小説作家の世代交代の推進でもあった。

本稿は、以上の二点に要約される戦後日本探偵小説の特徴を考える際に、諸テキストにしばしば見出される題材としての新宗教に着目し、戦後世相を生きる庶民の宗教感覚および新宗教ブームに見出される疑似ナショナリズムと、戦後探偵小説の物語構造との相関性を読み解くことを目的とする。言及する戦後探偵小説の主なテキストは、高木彬光「呪縛の家」(1949～50)・「白昼の死角」(1959～60)、横溝正史「迷路の花嫁」(1954)、松本清張「隠花平原」(1967～68)・「神々の乱心」(1990～92)である。

なお、日本探偵小説は戦後に推理小説という呼称に徐々に移行していったが、本稿では戦前との連続性に言及することに鑑み、主に探偵小説という呼称で論を進めていく。

1. 戦前の探偵小説は、雑誌に読み切り短編の形式で載ることが主流で、メディアも短編形式を推していた。江戸川乱歩は「日本探偵小説の多様性について」(『改造』1935年10月号／『鬼の言葉』所収 春秋社 1936年5月)の中で、「長篇小説の発達していないわが国の探偵小説界」と述べている。

一、戦後探偵小説の動向——新旧世代交代と探偵小説純文学論争

1945年8月、ポツダム条約を受け入れ無条件降伏、GHQ占領下という事態になった日本で、戦時中に発禁処分扱いを受けること頻繁であった探偵小説ジャンルが息を吹き返す。国策冒険SFもので活動していた海野十三、また大下宇陀児や水谷準のように悲観のうちに敗戦を迎えたミステリ作家もいたが、江戸川乱歩や横溝正史等は「これで大いに探偵小説ジャンルが復活する」という期待を抱いた。²

この流れのもと、探偵小説を扱うメディアも戦後的展開を見せていく。もっとも象徴的なのは、1920年創刊時から探偵小説の老舗雑誌であった『新青年』が、1950年7月号をもって終刊したことだろう。幾多の探偵作家を世に送り出した『新青年』だったが、戦後は編集方針にブレが生じ求心的な興味を惹く作家や作品の発掘に失敗して、同時期に陸続と発刊され出した他の探偵小説系雑誌と競合することが適わなかった。一方、『新青年』の衣鉢を継ぐポジションで新しく戦後の探偵小説ジャンルを牽引するべく創刊されたのが『宝石』である。乱歩や横溝といった戦前から活躍していたベテラン作家のみならず、新人作家の発掘にも力を入れ、高木彬光や山田風太郎といった有力新人作家を次々と送り出したことで、戦後の探偵小説ジャンルにおけるメイン雑誌となっていった。

この「宝石」誌上で戦後探偵小説動向を簡潔に把握すれば、以下の二点に要約できる。まず一つは、ベテラン作家達による本格長編探偵小説への挑戦とその成功だ。横溝正史が1946年に「本陣殺人事件」、1947年～48年に「獄門島」と、名探偵・金田一耕助の初期傑作を次々と発表したのに続き、角田喜久雄が1947年に「高木家の惨劇」を、そして探偵小説文壇外から坂口安吾が「不連続殺人事件」、未完に終わったが「復員殺人事件」と、これまた傑作・問題作を発表して話題となった。この時期に発表されたテキストは現代でもよく読まれ、もはや日本探偵小説のスタンダードとあって差し支えない長編作品群である。

二点目は、有力な新人作家が懸賞小説当選という形で、「宝石」誌上で続々

2. 「この夜、牛肉をつつきながら、私はいよいよ探偵小説復興のときが来た。これから盛んになるぞ」と話したところ、大下、水谷両君は少しも調子に乗って来なかったことを覚えている。大下君は、戦争に負けたら命はないものと覚悟していた。屈辱のいのちを永らえんよりは、死を選ばんとしていた。夫妻で、自殺する用意までしていた。又、水谷君は博文館が進駐軍司令部の命によってつぶされるという噂を聞いており、「新青年」の責任者として追放を受けるかもしれない状態にあったので、両君とも茫然自失の形で、探偵小説復興を喜ぶどころの話ではなかったのである。又、そういう復興が来るかどうかを、まだ疑っている様子でもあった。しかし、私は陛下の敗戦の御言葉と同時に、探偵小説の復興を予感していたことは、前にしるした通りである。」(江戸川乱歩「探偵小説復興の昂奮【昭和二十一年度】」『探偵小説四十年』桃源社 1961年7月／引用は『江戸川乱歩全集第29巻 探偵小説四十年(下)』p.198 光文社文庫 2006年2月)。

デビューした経緯だ。特に山田風太郎、高木彬光、島田一男、香山滋、大坪砂男は、「戦後派五人男」と称され、それぞれ戦後の探偵小説界を牽引する実作者としての才能を花開かせた。

一方、敗戦直後から1950年代にかけての探偵小説文壇は、戦争を挟んで前時代との連続／非連続をどのように自覚し、その上で今後如何様に発展していくべきなのかを問う論争を、しきりに提起するようになる。もっとも有名なのは、江戸川乱歩と木々高太郎の間で戦われた〈探偵小説純文学論争〉だ。これは、「探偵小説は文学か否か」という戦前から尾を引く論争³で、換言すれば本格探偵小説と変格探偵小説の二元的捉え方——探偵小説においてはトリックが先か人間描写が先かという問題をめぐるものだったが、敷衍すれば、これはそのまま文学とは何かを問う永遠の課題であり、日本近代文学史上では1927年に起こった谷崎潤一郎と芥川龍之介の間の〈小説の筋論争〉とも実は類縁性を持つ論争である。ちなみに、谷崎潤一郎も芥川龍之介も、その創作方法からの観点でそれぞれ探偵小説に関心を寄せていた。

トリックを犠牲にしても人間心理を優先させ、極論としては探偵小説からトリックを抜き去ってしまってもかまわないとする木々高太郎の主張に対して、探偵小説のジャンル性を強く意識する江戸川乱歩はトリックを下位に置く木々の極論に、「探偵小説にも人生がなくてはならない。しかしそれは謎と論理の興味を妨げない範囲においてである」と反発した。とはいえ、そのように強く疑義を呈しながらも、乱歩は「一人の芭蕉の問題」というフレーズを使い、将来「文学と探偵的興味とが両者の最高において渾然として一体となる」作品を埋める作家の登場を待望する⁴。今回は紙幅の都合により、これ以上深くはこの論争の内容に踏み入らないが、「一人の芭蕉の問題」が提示した将来への待望は、乱歩の思考を継ぐ高木彬光と木々高太郎の思考を継ぐ松本清張が戦後日本の探偵小説文壇にデビューしたことで、或る意味実現された側面がある。

高木彬光と松本清張は、日本探偵小説の戦後的動向を検討する上において、実に鮮やかな対照性をもった作家同士といえる。高木は1948年、乱歩の許へ直接持ち込んだ「刺青殺人事件」が岩谷書店から『宝石選書』として刊行され

3. 探偵小説芸術論争ともいう。1931年に甲賀三郎と大下宇陀児の間で生じた「本格変格論争」を発端に、1935年に甲賀三郎が雑誌『ぶろふいる』誌上で連載した「探偵小説講話」で、「探偵小説の範囲を無限に拡げて、芸術小説まで包含して、芸術たり得るといふ所論とは永久に食い違ふ」と主張。これに対し木々高太郎が反駁して、江戸川乱歩を巻き込み、激しい論争となった。

4. 江戸川乱歩「一人の芭蕉の問題」（『ロック』1947年2月号／『随筆探偵小説』所収 清流社 1947年8月／引用は『江戸川乱歩全集第25巻 鬼の言葉』p. 503 光文社文庫 2005年2月）。

てデビュー。自他ともに認める本格謎解き物の鬼⁵として活躍する。対する松本清張は、1951年に「西郷札」でデビュー。周知のように「或る小倉日記伝」で芥川賞作家となるが、探偵小説の分野にも早くから筆を染め、後に社会派推理小説と呼ばれる領域の開拓者となる。両者ともに、やがて歴史小説の方面へも創作分野を展開していき、邪馬台国をめぐる考古学的見解において1973年には激しく衝突した。両者の対照性は極めて鮮やかであるが、しかし、それでいて共通する点も多い。それは、戦後日本社会を生きる庶民感覚、およびそれが反映された世相動向に対する、鋭いアンテナである。そしてこのアンテナが反応した結果として、両作家ともに或る時期注目したのが新宗教というテーマであった点が非常に興味深い。新宗教を題材に取り入れた高木彬光作品には、「呪縛の家」(1949～50)、「女か虎か」(1970)、「狐の密室」(1977)といったものがある。このうち「呪縛の家」は高木にとって長編第三作目(神津恭介を探偵に据える長編としては二作目)にあたり、「読者への挑戦」を織り込んだ初めての雑誌連載物として執筆された。一方、松本清張には、「隠花平原」(1967～68)、「神々の乱心」(1990～92)があり、「神々の乱心」は清張の絶筆となった。それぞれの作家人生でメルクマールとなる作品の題材に、そろって新宗教が選ばれた背景にはどのような事情があったのだろうか。

二、戦前から戦後へ——政府の宗教政策と民衆の宗教感覚

宗教社会学者・島蘭進は『新宗教を問う』の中で、ロバート・ウスノフの言を引きながら「特に第二次世界大戦後は、宗教団体に加わるのが魅力的に感じられる時代だったといえるかもしれない」⁶と述べている。これは、社会学者の鈴木広が著書『都市的世界』の中で戦後の創価学会の成長を統計的に分析し、1960年代の新宗教の発展には村から都市へという人口の移動が関連しているとみなし、「主に農家(ないしは商家)に生まれ育った者で、戦時、戦後の混乱期に階層的・地域的に急激な移動を経験した人々」の存在が新宗教の相次ぐ勃興を支えた基盤にあるという見方を踏まえた意見である。

これらの人々の生活体験は、敗戦状況の最もドラスチックな刻印を主題としている。かれらはその社会的移動の過程でいわば共同体の崩壊感覚として自己を体験するといえよう。たしかに商工自営層と農民層とでは、その生産(営業)諸条件において相異のあることはいうまでもないが、にもかかわらず小農ないし

5. 探偵小説文壇界限では、本格探偵小説マニアのことを鬼と称した。同人誌『鬼』は1950年7月に高木彬光や山田風太郎らが本格探偵小説擁護を目的として創刊。1953年9月号まで3年間続いた。

6. 島蘭進『新宗教を問う——近代日本人と救いの信仰』p. 140(ちくま新書 2020年11月)。



図1 朝日新聞1949年10月17日

小商人としての家経営たる点に共通性があり、家の統合維持がかれらの重要な行動原則であった。農民の場合にはさらに家経営の維持自体が、生産・生活の家連合体との連携の維持を前提としていた。この原理は抽象化されて「日本社会の家族的構成」として知られているが、これを緯とするなら、^{よこ}経となるものは天皇制イデオロギーに体系化された

権威主義的行動原則であるといえよう。社会の家族的構成はこの場合、友愛型家族ではなく家父長型・同族型の構成を意味している。各レベルの家族的構造単位はそれ自身、家父長制的服属関係を内容とする共同体にほかならない。⁷

故郷から離れて暮らす都市住民の中間階層以下の人々が、「社会的移動の過程でいわば共同体の崩壊感覚として自己を体験する」中で、新宗教が形作る疑似家族的連携組織に、馴染みがよいが故に引きつけられていった事実は、たしかにあり得たと思われる。図1の新聞記事は、1949年当時に既に新宗教が300余波あったと報じている。この驚異的な数字は、政府が公布した宗教法人令の影響である。

そもそも日本の歴代政府は宗教政策の中で新宗教をどのように扱ってきたのかを簡単にまとめよう。戦前はまず1884年「太政官布達第19号」による宗教の区分けという事態があった。国家の祭祀としての神社神道、国家により公認された宗教、非公認の宗教という区分けで、これはそのまま「特別の宗教」・「まともな宗教」・「まともでない宗教」としてイメージされてしまう端緒を生み出した。⁸

続いて、1889年、大日本帝国憲法第28条が「信教ノ自由」を定めるが、周知のとおり、これは国体論的ナショナリズムとしての国家神道が許す範囲に於いての自由という限界枠を設けていた。戦後宗教史の研究では、この状況下に鑑み、庶民の感覚において、公の国家神道と私の諸宗教が重なりあうという二重^{わたくし}

7. 鈴木広『都市の世界』p. 294 (誠信書房 1970年8月)。

8. 永岡崇『新宗教と総力戦』p. 10 (名古屋大学出版会 2015年9月)。

構造的な宗教地形が生まれたことが、夙に指摘されている。⁹

そして上海事変勃発後の1939年、宗教団体法が公布。今度は、総力戦に協力する宗教と総力戦に抵抗する宗教に区分けされ、新宗教は特高警察監視の許、国体奉仕へ妥協する舵取りを選択せざるを得なくなっていくが、それを外圧による強いられる選択と取るか、それとも元来その教団の教えに国体論的ナショナリズムが内在していたのかは、慎重に分析する必要があると永岡崇は『新宗教と総力戦』の中で警告する。

敗戦後、GHQによる宗教政策は、以上の戦前における国家神道の解体を目指し、まず宗教団体法を廃止させた。続いて、1951年には宗教法人法が公布されたことにより、新宗教は続々と公認されていくことになるわけだが、しかし、GHQによるこうした戦後宗教政策は、国家神道体制の公のシステムの解体はなし得たとしても、戦前の1930年代頃から庶民の頭に刷り込まれていた国体論的ナショナリズムへの馴染みの感覚までも根絶やしにすることはできなかった。

戦前から新宗教は法華系教団と神道系教団に大きく二分されて捉えられるが、戦後はそれが複雑な分派を形成していった。これら多くの教団の内部構造には、解体された戦前の国体論的ナショナリズムの代替物として、いわゆる君臣民一体構想に酷似した疑似家父長制度的特徴が見出されるようになっていく。これが前述したような故郷から離れて暮らす中間階層以下の人々が希求する、疑似家族的共同体に合致していくのである。

以上のような戦後の新宗教の状況を、戦後の探偵小説の背景に見据えた場合、どのようなテキスト解釈が可能であろうか。以下、具体的な作品によって分析を試みる。

三、高木彬光「呪縛の家」が描く紅霊教と戦後新宗教の動向

戦前にも、たとえば小栗虫太郎「白蟻」（1935年）など新宗教を扱った作品は存在しており、そうした戦前作品との注意深い比較も必要であるが、今回は戦後の作品に焦点化し、且つ本格長編という特徴を重点化した分析を行う。

まず筆頭にあがるのが高木彬光「呪縛の家」である。初出は『宝石』1949年6月号～50年6月号。「刺青殺人事件」「能面殺人事件」に続く長編第三作目に当たり、名探偵・神津恭介の登場二作目となる。前二作が書下ろし作品であったのに対して、本作は初めての雑誌連載長編である。図2は連載第一回目が掲載された号の目次と編集後記である。ベテラン作家である木々高太郎の「我が女学生時代の罪」や大下宇陀児の「石の下の記録」と並んでいるあたり、大型

9. 島蘭進『国家神道と日本人』pp. 50-51（岩波書店 2010年7月）。前注『新宗教と総力戦』p. 18.

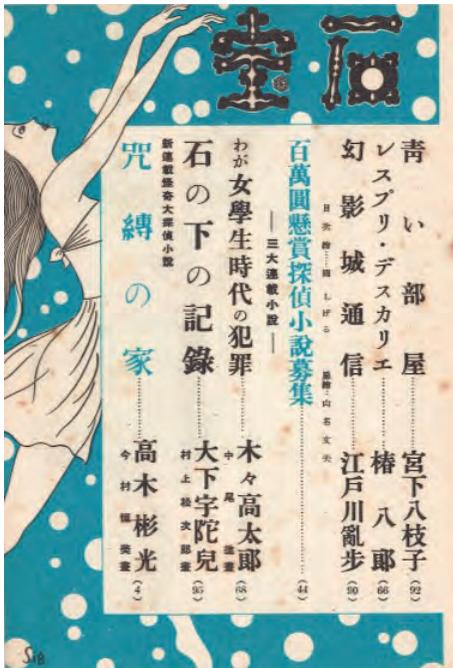


図2 『宝石』1949年6月号の目次

新人として高木が如何に期待されていたかがわかる。

「呪縛の家」は次のような物語である。奥武蔵野の八坂村に、紅霊教という新宗教を運営しているト部舜齋とその家族が暮らしていた。舜齋の弟子で破門されたト部六郎の予言どおりに、舜齋の孫娘が次々と殺されていく。名探偵・神津恭介とその親友・松下研三は、一高時代の友人・ト部鴻一の依頼で、この事件の謎を解くべく、奥武蔵野の八坂村・紅霊教本部へやってくる。ト部鴻一というのは、舜齋の姪の息子で、舜齋の孫娘・土岐子の恋人であった。

入り組んだ人間関係だが、実は新宗教を題材にした探偵小説では、たいがいこ

うした複雑に絡み合う血統図が出てきて、たいていは教祖を巡る血筋の問題に還元されがちという傾向がある。「呪縛の家」でも、紅霊教の教祖・舜齋が正妻以外の女性に産ませた子供が何人いて、それは誰なのかが、謎を解くカギになっている。

では、「呪縛の家」に出てくる新宗教・紅霊教とは、どのような教団として描かれているだろうか。テキスト本文を確認してみる。

当時この八坂村の水呑百姓だったト部舜作は、夢にふしぎな神託を得た。

身に神々しい白衣をまとい、眼にもまばゆい光を放ち、髪をみずらに結びあげた、絶世の美女が一人、彼の夢枕に立って、このように口走ったという――。

「よいかな。よいかな。われは天照皇大神なるぞ。ゆめゆめ疑うことなかれ。われ、なんじの信仰をめで、なんじにわれの力を託さん。この汚れはてたる濁世に、光の道を開くべし。なんじの行くところ、われもまた行く。なんじの言うところ、われもまた言う。もろもろの悪を討ち、醜魂をはらいて、この世に神の国をば開け……」

これはそのまま浄書されて、紅霊教の神典として、厳重に保存されているといわれる。当時三十三歳だった彼は、すぐその日から熱烈な運動を開始したのだ。¹⁰

天照皇大神のお告げや、巫女を演じる女の白装束で緋の袴といういでたち、御幣を捧げるという行為からも、紅霊教は明らかに神道系として想定されている。加えて、紅霊教の奥義は「この地上の万物はすべてみな、地水火風の四元素から成っているという単純な考え方」¹¹ともあって、これは本文で二千年前のギリシャ人と同じ考え方と明記してあるので、エンペドクレスもしくはアリストテレスの四元素説から採ったと推測でき、東西折衷のカオスな教条であることがわかる。

また、卜部舜斎は霊気療法なるものを信者に施すが、これは1935年に岡田茂吉が立教した大日本観音教団（後の世界救世教）が行う「浄霊の業」と呼ばれる「手かざし」、及びその前年に施法した岡田式心霊指圧療法がモデルとなっていよう。岡田茂吉はもともと大本教団の信者で、「手かざし」の療法は出口王仁三郎の「^{てしろ}み手代」にあやかっただけだが、大本教団から脱退した直後から施法した岡田式心霊指圧療法は医師法に違反しているとして1936年と1940年の二度にわたって検挙され、裁判沙汰になった。この時期は大日本観音教団にとどまらず、各地に心霊療法を名乗って信者の身体に触れる施法が「淫祠邪教」として一括りにされ、メディアに告発される事件が頻発している。1949年に連載が開始された「呪縛の家」は、紅霊教を教義の筋がカオス状態のいかがわしい邪教として描くが、その存在のリアリティは、当時の心霊療法報道の言説に拠ることで担保されているとみてよい。

しかし、その一方で「呪縛の家」のテキスト本文は、戦後に輩出した新宗教について次のような見解も示している点が興味深い。

終戦後、それまではきびしかった弾圧の手がゆるむとともに、全国各地には、数知れぬ疑似宗教が輩出した。

10. 高木彬光「呪縛の家」（『高木彬光長編推理小説全集2』p. 80 光文社 1973年4月）。

11. 前注「呪縛の家」p. 93.

双葉山¹²、呉清源¹³の二名力士を傘下に擁して、報道界を彩った璽光尊¹⁴は、その常軌を逸した無軌道さに、われわれを苦笑させた。それは当時のすさみきった人心に、一抹の清涼剤の役を果たしたともいえる。¹⁵

上の引用箇所からは、一方的に新宗教を差別排他するまなざしばかりではない、或る程度の理解と共感がうかがえよう。新宗教に対するこのアンビバレントな態度の背景には、何が考えられるだろうか。

四、横溝正史「獄門島」から「迷路の花嫁」——民間信仰と新宗教の連続性

高木彬光は登場人物の一人の口を借りて、「不思議なものです。科学では完全に否定されている邪説、迷信の方が、かえって人の心をひきつけるというのは、いったいどんな現象でしょう」¹⁶とも言わせている。このセリフに応えるかのような考察は、現代の宗教社会学者によってなされている。例えば、H・N・マックファーランドは『神々のラッシュアワー』で「新宗教の運動そのものは、本質的に、日本的伝統の「民間信仰」に属している」¹⁷と指摘した。同様のことを清水雅人も「新宗教の前史を担ったのは、幕末維新时期に創唱された民衆宗教であり、さらにその基盤を探れば、制度化されない民間信仰、祈禱、呪術信仰であった」¹⁸と述べている。

ここで想起されるのは、同じく戦後の本格長編探偵小説として「呪縛の家」に先行する、ベテラン作家・横溝正史の「獄門島」（『宝石』1947年1月号～48年10月号）における、生駒聖天の祈祷のくだりではなかろうか。高木彬光は横溝正史を「作家として食えるようになったのは横溝先生のおかげ」と慕い、成城にあった横溝宅へも足しげく通った。作家としての横溝正史を敬愛し、「獄門島」

12. 双葉山定次。大分県出身、第35代横綱。1945年現役引退後、新宗教の璽宇に入信。1947年1月21日に石川県警が行った璽宇皇居（金沢）の検挙に抗い、逮捕された。

13. 本名は呉泉。「昭和の棋聖」と呼ばれた、中国福建省出身の囲碁の棋士。1935年に紅卍会に入信、紅卍会日本支部の活動に加わる。1941年に紅卍会日本支部が篁道大教と合流し、その分派が璽宇となる。

14. 新宗教・璽宇の教祖。本名は長岡（旧姓は大澤）ナカ。改名して長岡良子を名乗る。岡山県出身。1941年、峰村恭平が興した新宗教・璽宇に参加し、1945年に璽光尊と自称。人間宣言をした昭和天皇に代わり、自らが神聖天皇であると唱えた。1947年に食糧管理法違反で逮捕され、精神鑑定で誇大妄想性痴呆症と診断されて釈放される。

15. 前注「呪縛の家」p. 80.

16. 前注「呪縛の家」p. 156.

17. H・N・マックファーランド『神々のラッシュアワー』p. 31（内藤豊・杉本武之訳 社会思想社 1969年12月）。

18. 清水雅人「新宗教の系譜」（『新宗教の世界I』p. 6 大蔵出版 1979年8月）。

を「遂に世界探偵小説、最高の水準に達した」と評している。¹⁹ 戦後の横溝の長編探偵小説を世界水準に達していると評価したのは、坂口安吾も同様であった。したがって、己の初めての連載長編に高木が「獄門島」を念頭に浮かべたであろうことは、十分蓋然性があると思われる。

「獄門島」は、島の網元の子息と結婚した流れ者の女芸人が生駒聖天の祈祷を行う巫女であり、彼女の生んだ三人の娘達が俳句の見立てどおりに次々と殺されていくという話である。人物関係、事件の起こり方など、「呪縛の家」とよく似ている。「獄門島」は生駒聖天という民間の呪術信仰を扱ひ、「呪縛の家」は神道系の新宗教を扱っているが、実はその宗教描写のイメージや着想はほとんど同根のものと言え、これは新宗教の基盤が制度化されない民間信仰であることを、探偵小説がその物語構造で期せずして明示していることになるのではなかろうか。この庶民の感性レベルでの民間宗教と新宗教の同一性を、宗教学者の村上重良は次のように説いている。

農民の宗教生活の基底には、農耕につらなるアニミズムやシャマニズムの伝統が強く生きており、農村から都市に流入した民衆や雑多な宗教者は、農村に育った諸信仰をつぎつぎに都市にもちこむ結果となつた。(略) かれらは諸国をめぐり、古来の民衆の仏教的な信仰やその知識を手掛りに、民衆の既成概念と結びついた形で、さまざまな「神」をつくりだしていった。²⁰

黒住教・金光教・天理教といった幕藩制解体期に興った代表的な新宗教は、まったくのオリジナルな発想からの出発ではなく、既存の民間信仰の再解釈によって信仰者および支持者を増やしていった。その意味では、新宗教は時の権力へのアンチテーゼとなり得るが、そもそもは保守的感性を基盤に普及していくものなのである。

横溝正史による新宗教を扱った作品としては、『地方新聞 いはらき』に1954年4月24日～9月29日に連載された「迷路の花嫁」がある。駆け出しの小説家・松原浩三が、東京・野方で霊媒・宇賀神薬子の惨殺死体を発見するところから、物語は始まる。薬子の師匠である赤坂の心霊術師・建部多門は、いかがわしい霊的治療や心霊術で多くの女性達を弄んでいた。色と金にまみれた都会の新宗教をめぐる連続殺人事件に、若い小説家と金田一耕助が挑むというあらすじだ。

19. 高木彬光「成城まいり」(『宝石』1962年3月号/引用は高木彬光『乱歩・正史・風太郎』pp. 72-73 山前讓編 出版芸術社 2009年11月)。

20. 村上重良『近代民衆宗教史の研究』pp. 18-19 (法蔵館 第2版第1刷 1963年11月/引用は第2版第2刷 1972年9月)。

では、その描かれた新宗教の具体的な内容を、本文から適宜引用しよう。

畳をしいた座敷のおくに六畳ほどの板の間があり、板の間には紋を白くそめぬいた紫の幕が張ってある。板の間のなかには祭壇が設けてあって、そのうえに、「なんとかの命」と、雄渾な達筆で書いた軸がかかっている。(略)

祭壇のうえには、そのほかに、鏡と玉と三宝がおいてあり、サカキをさした陶器の花筒が倒れている。²¹

その女も、座敷に倒れている女と同じように、オオクニヌシノミコトのような髪を結いかたをしている。色目ははっきりわからないが、羽織をすそ長に着て、袴をはいている。²²

「わしという霊体にふれることによって、彼女たちは霊媒としての素質を向上させることが出来るんだな。わしの肉体から放射する一種の霊的エマナチオンを、彼女たちは抱擁のうちに摂取する」²³

心霊術師の建部多門は、心霊術のほかに一種の祈祷みたいなこともやるのである。いや、心霊術よりも、この怪しげな祈祷の方が、多門の重大な収入のみちとなっているようだ。建部多門もまた、戦後はやる何々教祖というようなもののひとりであるらしい。²⁴

建部多門と宇賀神薬子の営む新宗教も、上の引用にみるとおり神道系で霊的療法を行い、「呪縛の家」の紅霊教とほとんど大差ない内容である。民間信仰と新宗教は、地続きで連続性の強い、村上重良が指摘する通りの構造として認識されていることがうかがえる。加えて、色と金のいわゆる淫祠邪教というレッテルでひとしなみに括られるものという見方が強固としてあったもようだ。「呪縛の家」も「迷路の花嫁」も、そうした民間信仰と連続する新宗教について、「淫祠邪教」の名のもとに激しい嫌悪と批判を露わにし、新宗教自体にはまったく同情のないテキストとなっている。²⁵ 新旧の戦後探偵小説界を代表する作家達における、この新宗教嫌悪はどういった理由によるものなのか。

21. 横溝正史『迷路の花嫁』p. 20 (角川文庫 1976年11月)。

22. 前注『迷路の花嫁』p. 25.

23. 前注『迷路の花嫁』p. 94.

24. 前注『迷路の花嫁』p. 142.

25. 「淫祠邪教」の名の許に民間信仰を裁断する見方は、西欧合理主義を輸入した明治期における迷信打破の啓蒙運動の一環として現れ、以降の言説場で継承されていく。たとえば、和田徹城『淫祠と邪神』(博文館 1918年11月)が取り上げているのは、聖天・稲荷・大黒天・弁財天・毘沙門天・金毘羅・庚申・荒神・竈神・摩利支天・妙見・閻魔・帝釈天といった具合である。

ここで再度、宗教学者・村上重良の言説を参照する必要があるだろう。村上は1958年に刊行した『近代民衆宗教史の研究』の中で、明治後半期の新宗教教団の国家神道への妥協は、結果としてその教団の半封建的構造を強化し、信者の間にある呪術性・神秘性を温存助長して近代化を阻むことになったと厳しく批判している。本稿はこの村上の言を、新宗教解釈に於いて妥当かどうかという視点ではなく、横溝や高木が戦後探偵小説の中に新宗教を持ち出してきた当時における同時代言説の顕著な例の一つとみなす。村上は他の著述でも繰り返し、この見方を用いて新宗教の半封建的構造を糾弾するが、その発話行為の背後には近代主義知識人として戦後世相を裁断するまなざしが厳としてあるのだ。

村上重良ほど学術的論旨をもった展開ではないが、同じような見方を擁する言説は、新聞や雑誌といった大衆メディアでも同時期に散見する。大衆メディアの言説は、アカデミズム言説の近代主義と根は一つでありつつ、いっそう扇情的に、現世利益的側面を〈金〉・治癒療法的側面を〈色〉として強調していく傾向がある。たとえば戦前から新宗教批判を執拗に繰り返していた大宅壮一の戦後における新宗教批判言説「新興神さま総まくり」（『東京日日新聞』1949年1月）は、【ありがたや恋の神さま、信仰ならよい？ エロ】という一節で、「新興宗教にはすべて病気が治るとか、開運すなわち金もうけや栄達といったような、“ごりやく”がつきもので、それでもって大衆をひきつけているのであるが、そのほかに性的吸引力を巧みに取り入れているものも少なくない」と、徹底的に〈色〉と〈金〉で新宗教を解釈し攻撃している。新聞記事を適宜拾っていけば、下記のように、戦前から戦後にかけて連続的に同様な見出しを簡単に幾つも発見することができよう。

【信心で身を誤った女が又二十数名 心霊会指圧療法教主の魔手 はびこる淫祠邪教】（『朝日新聞』1934年12月11日）：心霊会による指圧療法を淫祠邪教と裁断。

【淫祠邪教を撲滅の指令 宗団を全面的に抉る 内務、文部両省起つ】（『朝日新聞』1936年9月30日）：ひとのみち教団を淫祠邪教として批判。

【既存宗教の沈滞と邪教発生】（『朝日新聞』社説 1947年1月27日）：仏教批判。

【偽善なる『神様』の仮面をはげ】（『読売新聞』社説 1949年9月27日）：靈光尊批判に「邪教」の表現あり。

【梅雨の毒茸 戦後の邪教】（『読売新聞』1950年6月3日）：観音教団を邪教として批判。

【新興宗教 恋と欲の人生案内】（『読売新聞』1951年11月26日）：立正佼成会の女性信者を蔑視。

つまり、1940年代末～50年代にかけて多く発生した新宗教の中に、近代化を阻む呪術性・神秘性を見てとってそれを批判するという言説が戦前との連続性をもって数多く提示され、メディア上ではそれがほとんど常識化し、煽情性をもって乱発されていた状況だったということがわかる。この近代主義に偏向した過剰なまでにストイックなまなざしこそ、戦後日本の本格長編探偵小説が目指した「世界水準」の到達点と類を同じくするものであったのではなかろうか。「世界水準」すなわち英米ミステリの水準であるとすれば、戦前日本の封建的構造を内包する共同体＝新宗教団体へ戦後テキストとしての探偵小説が激しい批判言説を展開するのも納得できよう。換言すれば、もともと封建主義的共同体構造に対して抵抗する姿勢を潜在的に宿している、まさに近代合理主義の側に立つ文学ジャンルとしての探偵小説が、勢い戦後の新宗教を強い否定のまなざしで解釈し、名探偵によってそのいかがわしさ＝半封建主義的思想の潜在性を暴かれる対象として描くのは、当然の帰結であったといえるのかもしれない。

五、太平洋戦争の影としての新宗教

次に、もう一つ別の角度から、「呪縛の家」に描かれた新宗教を考えてみたい。それは、太平洋戦争の影としての新宗教である。

紅霊教の過去を語るくだりで、「卜部舜作は、舜齋と名を改めて、軍閥の走狗となった。私も高校当時、彼の著作を見たことがある。それは（中略）日本列島を拡大すればそのままに、全世界となってしまう。豪州は四国、アフリカは九州、米大陸は……あまりにばかげてそこまで覚えていない。要するにそれは、日本の侵略思想の象徴だった。」²⁶と説明する箇所がある。これは明らかに田中智学の国柱会と、それが掲げた八紘一字思想のもどきである。また、「紅霊教の本部には、軍から戦時中流れ出した、大量の麻薬が隠匿されている」²⁷という記述も注目される。満州の関東軍による財政収入が阿片だったことは周知のとおりで、松本清張「神々の乱心」の主要な設定にもなっている。1923年に『北京新聞』編集長として関東軍参謀に近づき中国の国民党とも人脈をもち、1937年には上海特務機関の資金調達のため三井物産等と連携して阿片売買を始めた里見甫（1896～1965）が、その代表的人物である。そもそも、紅霊教があるとされ

26. 前注「呪縛の家」p. 81.

27. 前注「呪縛の家」p. 165.

る奥武蔵野という土地は、テキスト本文に「この丘には、戦時中に軍の作った洞窟や横穴が縦横に残っている。」とあるとおり、中島飛行機武蔵製作所があった土地で、高木彬光はその中島飛行機に戦時中就職していた。「呪縛の家」連載当時の読者の念頭には、以上の情報がすぐ浮かんだことだろう。

なぜこれほどまでに、「呪縛の家」の描く新宗教には、そのモデルがすぐ判明するほどに太平洋戦争の影が濃く描きこまれているのだろうか。理由として考えられるのは、「呪縛の家」のテキストが、新宗教を疑似ナショナリズムとして批判する立場に明確に立っているからではないかという推測だ。これは前節で提示した、封建主義的構造への批判と根底は同じものである。

新宗教に関する諸研究では、「世直し」を唱える新宗教教団自体にナショナリズム親近性が潜在している点を指摘する声が多くある。たとえば天理教の教義(おふでさき)に帝国主義的・植民地主義的な要素を読む可能性が存在することや、大本教団の白馬に乗る出口王仁三郎の写真(1933年)と天皇の乗馬姿との相似性、それらに伴う数々の不敬事件としての摘発等である。新宗教がたびたび不敬罪という面目で弾圧されたのには、その教義や教団構造が天皇制および国体概念のもどきとして成り立つ要素があるからなわけ、**「呪縛の家」**はそうした新宗教の疑似ナショナリズムに過敏に反応して、意識的にか無意識的にかわかわらないが、ともかくも激しい嫌悪を示すテキストであるのではないか。この嫌悪感の発露は、新宗教へ惹かれる大衆心理への共感を切り捨てた論理を導入してしまう。

戦後における人間天皇出現に戸惑う民衆は、新宗教に代替ナショナリズムを期待するところがたしかにあった。所属する共同体を喪失した庶民を受け入れる、新たな共同体としての機能を新宗教が果たすことが可能な世相だったのである。代替ナショナリズムとしての新宗教団体は、血統で教祖が継承される内部構造を持ち、これが万世一系とされる天皇制のアナロジーとして庶民の感覚ではすんなり受容されるわけだ。**「呪縛の家」**には、「組織の力というものは恐ろしいものである。彼のこの靈感は、それほど長くはつづかなかつた。だがしかし、無知蒙昧の大衆は、予言などは実はどうでもよいのであつた。彼らはたえず、何か自分らのすがりつくものを求めてやまぬ」²⁸ や、「大衆というものは考えることを嫌います。スローガンは単純なほどいいのです」²⁹ などといった、大衆蔑視とも解釈できる言が散見している。新宗教の代替ナショナリズムに無批判に取り込まれていく庶民の宗教感覚を、反近代的なものとして括ってしまおうとする、探偵小説の

28. 前注「呪縛の家」p. 81.

29. 前注「呪縛の家」p. 156.

物語構造の限界がそこに見出せよう。一方で、戦中派世代として戦争と天皇制の問題に鋭く反応する高木彬光の我慢ならない憤りがかいまみえる箇所ともいえ、それについては後段で再度言及する。

しかし、興味深いことに、「呪縛の家」テキストは、ここでもまたアンビバレントな態度をみせる。新宗教批判の言は、卜部舜斎の隠し子で事件の実行犯である菊川隆三郎医師³⁰によって「終戦後、あらゆる精神の支柱と基盤を失って、混迷と動揺の底に沈んだ人々の苦悩と焦慮を餌食とし」³¹と語られる。宗教団体そのものへは激しい糾弾をしながらも、それにどうしようもなく惹かれ取り込まれてしまう民衆の心情には、理解と共感がないでもないという書きぶりなのである。さらに重要なことは、名探偵・神津恭介が最終的にこの事件全体を通してもっとも罪深い人間として名指したのは、紅霊教の教祖・卜部舜斎でもなく、連続殺人を実行した菊川隆三郎医師でもないという点だ。殺人が行われるのに気づきながら、見て見ぬふりをして、いっさいの責任的咎めを受けずに紅霊教の財産すべてを手中に収めた傍観者・卜部鴻一こそが、「ほんとうの極悪人」であると神津恭介の口を借りて高木は裁断するのである。

「僕はいままで、この犯人、菊川医師を、悪魔の生まれかわった人物、このうえない極悪人だと思っていた。だがやはり、上にはさらに上がある。(略)

むしろ、人に罪を犯させて、その生命を代償にささげさせ、自分はその結果、生ずる利益を楽しもうとする、そういう冷たい考え方が、もっとも恐ろしいものなんだ……」

「神津さん、卜部鴻一を、法廷にひき出すわけにはいかないんですか」

私は、そう言うだけが、やっとだった。

「何の罪で、何を証拠に突き出すんだ。刑事に麻薬をかがせて、逃げだしたなどというのは、彼が犯人でない以上、単なる公務執行妨害、このくらいでは、どんな検事も起訴はしないだろう。

とって、殺人幫助罪でも、教唆罪でもない。いまの言葉など、冗談だったといえ、それですむことなんだ。人間の心の動きはわかりはしない。たとえ、殺人以上に恐ろしい罪を考えていたところで、それが明白な行動に移らなければ、どうすることもできはしない。(略)」³²

このラスト・エンディングにおけるやり場のない怒りを込めた諦念の発露は、

30. 精神科医・式場隆三郎を彷彿とさせる名前である。

31. 前注「呪縛の家」p. 223.

32. 前注「呪縛の家」p. 229.

戦中派世代と戦後問題というテーマに直結していくものと考えられる。卜部鴻一が神津恭介、そして松下研三と同じ、一高で学んだ学生であったという設定は重要だ。卜部鴻一は実家の紅霊教が軍国思想を煽っているとして同窓生から非難攻撃された過去を持つ。³³一高生というインテリ層の内部に潜在しているエリート意識と大衆蔑視の論理、新宗教団体内部に潜む半封建主義的傾向と疑似ナショナリズムへの反発、そして戦後問題を傍観するほかない観察者の後ろめたさと開き直り——これらは戦中派世代である作家自身の内面の投影であるだろう。本格長編探偵小説の物語構造に仮託された自虐的なナラティブへの志向が、高木彬光をして新宗教を題材に選ばしめた根本理由であった可能性は高い。

六、松本清張「陰花平原」——新宗教の現世利益と政財界の癒着

高木彬光「呪縛の家」が当時の言説場に依拠しつつ自虐的なナラティブ志向という作家の内面へ向かうベクトルをうかがわせるのに比較して、それより17年遅れて松本清張が発表した「陰花平原」はどうであろうか。松本清張「陰花平原」の初出は、『週刊新潮』1967年1月7日号～68年3月16日号である。大手銀行の会長・花房忠雄は仏教系新宗教の普陀洛教信者であるが、若い頃から女道楽で多くの愛人を作り、結果、私生児を多く作った。この花房忠雄を父とする異母兄弟達の妬情が複雑に絡んで、連続殺人事件が出来するというのが物語の骨子である。殺人事件が新宗教に絡んでくる直接的な動機は、銀行の公金横領だ。つまり、この作品も、新宗教を描くのに〈色〉と〈金〉をキー・タームにしているわけで、「呪縛の家」や横溝正史「迷路の花嫁」と共通の言説背景に拠っているかとみられる。しかし、そのナラティブの志向は「呪縛の家」とは異なるベクトルを示す。両テキストが示すこの差異は、戦後探偵小説の方向性の分派の様相と相似形を描くものと考えられる。この見通しのもと、以下、「陰花平原」が描く新宗教・普陀洛教について検討していく。

普陀洛教の内容も、一見すると先行する探偵小説に描かれた新宗教と、ほとんど大差はないかのように見受けられる。普陀洛教は終戦後まもなく興った観音を信仰する仏教系新興宗教。本部の在所は静岡県真鶴に設定されている。教団の名前「普陀洛」は、華嚴教にある観音の霊地「補陀洛」の一文字を変えて「普陀洛」としたものの。テキスト本文では教団パンフレットに書かれた文章として、

33. 「呪縛の家」第一章で、松下研三による一高時代の回想で語られるエピソード。或る冬の夜、蠟燭（蝋燭）の火で勉強することをしてきた寮生達は、卜部鴻一を鴨にして紅霊教の非難攻撃を行った。非難的にされた鴻一は、寮生の二人には死を、神津とは将来対決する運命にあると予言する。後者の予言の理論的謎解きはテキスト中でなされるが、死の予言をなぜ鴻一がなし得たのかについての合理的な説明はなされないままである。

紀州熊野・栃木日光の補陀洛信仰に連なるとしつつも、観音の霊地すなわちユートピアを象徴的な場所ではなく、現実^{レトリック}に在るとみなす立場を取り、「古い観音信仰と区別するため普陀洛教と名づけたのであります」³⁴と説明されている。新宗教の現世利益的側面を巧みに取り入れた設定だ。

普陀洛教の初代教祖は、三重県の片田舎の小学校教師であった為賀宗章という男。次教祖はその息子の為賀宗文に引き継がれ、前節で述べたように天皇制を模した血統による家父長制=疑似ナショナリズムが顕著である。三重の小学校教師という設定からは、当然ながら伊勢神宮の存在、つまり国家神道の気配がただよう仕掛けにもなっている。ただし、「呪縛の家」や「迷路の花嫁」が採用した、巫女的役割を果たす女性(「陰花平原」)の普陀洛教では登場しない。新宗教団体に関係する一人の男と、彼をめぐる複数の女性という〈色〉の構図は、「陰花平原」でも確かに踏襲されているものの、異母兄弟の母達は後景に退かされており、この作品のメインテーマは徹底的に男達で演奏される。³⁵〈色〉よりも〈金〉の方に焦点をあてて新宗教を語る松本清張テキストの傾向が、この点から見出されてくるのだ。

普陀洛教は、現世にユートピアを顕現させるという目的で、「ある一定の地域に本教の信者だけの町を建てる」「土地も家もちろん信者自身のもの」「町にはみんなの尊敬を集めた人が代表者となり、みんなの意見や希望を聞いていろいろな設備を建設する」といった宗教都市の建設を目論む。武者小路実篤の〈新しき村〉への言及もみられ、相互扶助的な組合を目指し、観音の霊地の顕現を信者の住宅確保のための大規模団地建設という、まさに現世利益そのものの実現に読み替えようとして莫大な資金を必要とし、それが公金横領に繋がっていく。教団の団地が作られる計画がある相模大野は旧陸軍の用地である点からして、やはり「呪縛の家」と同じく戦争の影が見え隠れはするものの、テキストの言説は戦争の影よりも戦後の住宅をめぐる法整備に依拠しながら展開されていく。

周知のとおり、戦後まもなくの日本は核家族の増大に伴い、都市の住宅難が最大の社会的問題の一つであった。GHQによって解体された住宅営団に代わり、1955年に日本住宅公団が設立。住宅市街地の新たな開発や土地区画整理が実施され、いわゆるニュータウン開発事業がスタートしていく。1965年、地方住宅供給公社法が制定されると、国営ではない民間事業も住宅産業に参加できるようになり、郊外宅地住宅の需要が激増していった。「陰花平原」における普陀洛

34. 松本清張『陰花平原』p. 247(新潮文庫 5刷 1997年11月)。

35. 萩村綾子は謎の女として登場するが、玉野文雄の愛人というだけで、新宗教が絡む血縁の系図では部外者である。

教の団地計画は、こうした郊外住宅開発＝ニュータウン計画勃興の現実を背景にして描かれている。このニュータウン計画が、日本の家制度と家族構造の大きな変化に基づくものであることを洞察していたであろう松本清張は、新宗教に仮託して、日本社会の家族観の変質を描こうとしたのではなかったか。

だからこそ、「陰花平原」の探偵は、「呪縛の家」における神津恭介や「迷路の花嫁」における金田一耕助のような第三者的立場を取る事件外部の人間＝私立探偵ではなく、事件の渦中に巻き込まれた人間＝当事者とされたのだろう。探偵にも家族があり、それがために家族観の変質を問う事件と無縁の存在ではあり得ないというわけだ。³⁶

ところで、「陰花平原」の連載が開始された1967年の3年前には、公明党が結成されている。法華経系新宗教である創価学会を支持母体とする公明党は、1954年に創価学会が政界への進出を目論んで設立した文化部を基とする。創価学会文化部は設立以降、順調に議席確保数を伸ばしていき、第三代会長・池田大作の頃にはその政界進出の勢いはもっとも激しかった。しかし、そのことが新宗教と国政の癒着への懸念を世間が感じ始める事態となり、創価学会は政界進出活動を表向き教団から切り離す。その結果、1964年に誕生したのが公明党である。公明党は創価学会とは活動を別にする形をとりつつ、実質的には学会幹部が党の議員を兼ねることで学会を強力な支持母体とし、1965年の第7回参議院議員通常選挙および1967年の第31回衆議院議員総選挙で、それぞれ議席を確保した。創価学会と公明党の政教分離の不徹底がメディアによって指摘され、会長はじめ学会幹部が党の議員を兼ねる事態が撤廃されるのは1968年～70年にかけてのことである。「陰花平原」における新宗教の描き方は、こうした戦後の政財界と宗教団体との不即不離な関係に、期せずして抵触している感があり、その意味で戦後経済小説としての萌芽を見せてもいるのである。

ちなみに、「陰花平原」連載の2年前の1965年から、高橋和巳「邪宗門」の連載が『朝日ジャーナル』で開始されている。「邪宗門」は66年5月号で連載終了したが、純文学として新宗教を扱ったこのテキストは、大本教団をモデルに、そこに集う人々と日本社会の貧困構造とを教団の弾圧史に絡めて描き、新宗教の側からまなざされた言説で構成されたテキストであった。探偵小説の新宗教嫌悪・批判の言説構造は、同時代文学としての「邪宗門」などと比較すると、より際立ってくるのである。

36. 山辺修二と共に事件を追っているとみられた西東九郎巡査もまた、花房忠雄が生ませた私生児の一人であった。

おわりに

しかし、「陰花平原」以降の松本清張は、この新宗教テーマを、経済方面よりもむしろ国家神道すなわち国体的ナショナリズム=天皇制を問う歴史小説の方向へシフトさせようとした。それが『週刊文春』1990年3月29日号～92年5月21日号に連載された「神々の乱心」である。この作品は清張の死によって未完となったが、半藤一利の言によると、死の直前、清張は「神々の乱心」の結末の執筆を促された際、「いや、あれはもう先がわかったからいい」と答えたそうである³⁷。もしそれが本当なら、新宗教の反近代性を天皇制のアナロジーとして解釈する「神々の乱心」の物語構造に、敗戦直後から1950年代にかけて探偵小説文壇にみられた新宗教モチーフとの類似構造を自ら悟り、今更といったアナクロニズムを感じたせいかもしれない。

一方、高木彬光は「呪縛の家」以降も新宗教テーマを扱った作品を書き継いでいくが、むしろテーマを経済幻想の方へと飛躍させ、詐欺集団に騙される庶民の姿に新しい戦後の宗教的陶酔・盲目的信仰を見出そうとした。それが、日本初の本格的コンゲーム小説として成功した「白昼の死角」であると考えてはどうか。新宗教の現世利益的な側面を戦後アプレゲールによる高度な詐欺のテクニクに置き換え、天才的詐欺師をヒロイックに描くことで若者の教祖的存在にまで高めた³⁸この作品は、松本清張の開拓した社会派推理小説とは異なる立場で、新宗教のテーマを突き詰めた結果といえるのかもしれない。

こまつ・しょうこ
(金城学院大学)

37. 半藤一利の言「清張さんが倒れられたその日の午後、次回作の打ち合わせで会っていたんですね。テーマは、GHQ内部の確執と服部卓四郎機関、そして日本軍備の内幕。「週刊文春」に『神々の乱心』を書いていたので、「先生、『神々の乱心』をきちんと終えてから次の仕事にいきましょう」と言っても、「いや、あれはもう先がわかったからいい」と。(座談会「担当編集者が見た、孤高の国民的大作家。」「東京人 特集「松本清張の東京」」p. 34 2006年5月号)。

38. 内海陽子「悪に生きる男・鶴岡七郎の魅力とは ——夏木勲インタビューを中心に——」で、俳優の夏木勲は映画『白秋の死角』で鶴岡七郎役に決まった時に、「(仲間から)なんだ、おまえが演るのかって。ばかやろうって(笑)。俺たちの憧れの七郎を、おまえが演るのかって、こっぴどく罵詈雑言を浴びてね」と答えている。(『キネマ旬報』p. 77 1979年4月号)。